

松下幸之助記念財団 研究助成  
研究報告

(MS Word データ送信)

【氏名】 呂怡屏

【所属】 総合研究大学院大学 文化科学研究科 比較文化学専攻

【研究題目】 民族資料の文化資源としての活用に関する博物館人類学的研究：  
台湾における原住民族の事例を中心に

【研究の目的】 (400字程度)

民族資料の収集、展示の運用に関わる権力関係と政治性への批判的な研究によって、近年、博物館とソースコミュニティのよりよい関係を築こうという課題が世界中で重視されている。

1990年代、研究者たちは収蔵品の元の所持者の権利を重視しつつ、内省しながら民族学資料の収集及び展示の歴史や権力の動きを検討し始めた。それを受けて、従来博物館が一方的に収集した収蔵品は、様々な試みによって、その収蔵品の元の所持者であるソースコミュニティと共有する情報及び資源となった。相方向的な協働へ進む仕組みの探求が進んでいる。

申請者は自身の出身地である台湾にも同様の課題が見だされることに着目する。台湾の博物館と台湾の南部における原住民平埔族の西拉雅族を対象とした現地調査を踏まえて、両者は民族資料の文化資源としての活用に対してどのように考えるのかという課題に取り組んだ。それを通して、博物館と民族の物質文化が近代の民族アイデンティティの形成過程に対して、どのような役割を持っているのかを検証した。

【研究の内容・方法】 (800字程度)

本研究は全体として2014年から2016年までの3年にわたる調査研究の一年目と二年目を実施したものである。現地フィールド調査を実施する前に、2014年には、台湾南部に暮らしている平埔族の西拉雅族と外部の接触の歴史と、博物館の平埔族に関わる民族資料の収集過程について先行研究を整理した。2015年には、博物館のキュレーターをインタビューすることで、博物館における平埔族像を構築する概念を考察した。

17世紀からオランダ人、スペイン人、漢人により、台湾の平埔族は文字、モノの収集と風俗絵図などの方法で記録された。その中で、統治者の視点から記録された資料は、平埔族に含まれた各民族集団が「異文化」から「服従させられた」集団になったという描き方をする傾向がある。一方で、民間の契約文書には、外来勢力の統治の下での社会構成と平埔族の生活変化が反映されている。

19世紀に入ると、民族学研究の進展とともに、平埔族に関する記録写真および生活道具が探検者や宣教師によって収集され、比較的体系的な調査が始まった。19世紀末台湾は日本統治時代に入り、日本の民族学と人類学の研究者は全面的に台湾原住民の生活や分布状況を調査した。1900年に伊能嘉矩により台湾先住民が分類されて、概ね高砂族(今の高山族)と平埔族に分けられ、シラヤ族は平埔族に属するとされるようになる。

原住民族の調査とともに、民族学の標本資料の収集も始まった。シラヤ族に関するモノは生活道具、衣装、契約書や儀礼道具である。とくに衣装の収集品に外来勢力—漢民族や高山族—との交流の痕跡が反映している。

平埔族の収蔵品は長期間、博物館の収蔵庫に静かに眠っていた。1990年代から台湾で文化の主体性を重視するようになり、かつ原住民運動の活発化を背景として、平埔族の収蔵品はようやく展示で活用されるようになった。今回調査をおこなった国立台湾博物館、順益台湾原住民博物館と国立台湾歴史博物館は平埔族と接触（contact）し、共同作業で展示をおこなった。

各博物館はそれぞれの仕方でシラヤ族あるいは平埔族の人々と連携関係を築いた。最初にこの動きを始めたのは国立台湾博物館である。同館は館内の収蔵品の性質に合わせて、考古学資料、絵図、契約書、衣装などのモノを用いて、2009年に平埔族の歴史的展示を行なった。2015年の特展も歴史的なアプローチで、「康熙臺灣輿圖」という図絵に基づいて、中に見られる生活様相を来館者に紹介している。順益台湾原住民博物館は開館初期から、毎年ソースコミュニティとコラボレーションして展示を作るという方針を定めた。こうして2011年にシラヤ族に属するカブアスア村の人々を中心として連携をした。国立台湾歴史博物館は平埔族の人々が住んでいる台南市にある。同館の目標は「台湾に暮らしている人々の生きる物語を示す」ことである。そのため、2103年に、歴史を振りかえながら、現代のシラヤ族の人々が直面している課題を反映し、特展「平埔族を見つめる」を開催した。

#### 【結論・考察】（400字程度）

平埔族に関わる民族資料は、現在の平埔族の人々にとって、過去の生活と文化を解読する際に重要な資料である。一方で、それらの収蔵品にも平埔族と外来勢力との接触や政治経済的な交流関係が反映されている。

今回の調査を通じて、台湾の博物館には収蔵資料の活用に対して、二つの考え方があることが分かった。一つ目は、ソースコミュニティは文化復興する際の主体となるべきであるという考え方である。その場合、博物館は支援者として、ソースコミュニティが文化継続をするために博物館技術や収蔵品を使わせる。もう一つの考え方は、博物館から積極的にソースコミュニティと接触・交流すべきであるというものである。博物館の収蔵品を資源にして、積極的に館外との連携関係を広げようとしてつとめている。

博物館展示における平埔族像の変遷も見られるようになってきた。1990年代半ばに、台湾の歴史に関する研究が盛んになってきたうえ、博物館に収蔵された平埔族のモノが新しい史料と見なされ、平埔族の歴史と文化研究に新たな視点を与えた。歴史学研究者と博物館キュレーターの研究により、かつての社会の周縁の存在という視点を変えて、平埔族の社会・文化に含まれている交流・変遷という側面を強調した。この視点に基づいて、従来平埔族の歴史、伝統生活や宗教だけを展示した博物館は、現代の平埔族の生命力を見つめなおし、特に平埔族の正名運動と文化復興に焦点を当てた。

この動きを踏まえて、ソースコミュニティと博物館の連携も始まった。今回調査対象としたシラヤの人々は展示の協働作業および展示の観覧を通して、自分の文化に対する解釈の権利とプライドを徐々に向上させるようになることが分かった。また、文化を復興する際にシラヤの人々は博物館の収蔵品を活用することも頻繁になってきた。こうして、博物館は収蔵品を詰め込む場所から、ソースコミュニティと対話する場所になった。また、ソースコミュニティとの連携によって、かつて一方的に平埔族の文化様相を構築した博物館も、現代のシラヤ族の文化伝承に積極的な役割を果たす場所になっている。